

ピッツィカのリズムとダンスが魂をゆさぶる。



日本における
イタリア
2001
ITALIA IN
GIAPPONE



SIDECAR FILMS & TV
in collaborazione con PABLO
e MOBIUS Entertainment Corporation
presentano

Distributed by  CABLE HOGUE CO., LTD.

SANGUE

血の記憶

VIVO

サンセバスチャン国際映画祭新人監督賞
モンペリエ地中海映画祭最優秀作品賞
セイント・ヴィンセント映画祭最優秀作品賞、サウンド・トラック賞

“新しいイタリア映画の黄金時代の幕明け”を告げる傑作

エドアルド・ウィンズピアは、かつての生き生きとしたかがやきをとり戻したイタリア映画界から現れたもっとも新しい才能だ。イタリア映画の豊穡な過去と晴れやかな未来をつなぐ旗手である。

『血の記憶』は、古典的なテーマを太古の時の流れを感じさせる顔と、魂を奪い、ことは異なる時間軸に誘い出す狂おしいリズムで綴り、表現主義的なまでに鮮烈でリアルなエモーションを伝える。フェリーニの残した『道』のように、ひとつの物語がどこかで普遍的な次元に入ってしまう希有な力を持った作品である。

貧困と犯罪がはびこり、赤く灼けた大地に抑えたい情熱の炎が宿り、それが力強いタンバリンの響きとなって打ち出されるイタリア南部のサレント地方を舞台に、父親の不幸な死をめぐる対立する兄弟の愛と憎しみ、見果てぬ希望と限りない絶望、無数の不条理の罫、そしてそうしたすべてをとりこみ、悲劇と和解へ向かってそのまま巨大な竜巻のように飲みこんでゆくピッツィカの音楽と踊り——それはフィクションでありながら同名の主人公（つまり自分自身）を演じるビーノ・ズィンバが生身の人間であるように、いわば現実を越えた現実を描いた物語だ。

イタリア半島の最南東に位置するサレント地方に今も脈々と、力強く生き続ける太古からの意識と、この土地に根を下ろして時に過酷な、常に技量にも似た感覚を誘う生を送ってきた人々の肉体を流れる熱い「血」を鮮やかに描きだした傑作である。



血の記憶 SANGUE VIVO

2000年 / イタリア / カラー / 96分

監督：エドアルド・ウィンズピア

脚本：ジョルジア・チェチェレ、エドアルド・ウィンズピア

撮影：パオロ・カルネーラ 音楽：ZOE'：グルッポ・ゾエ

出演：ビーノ・ズィンバ、ランベルト・ブローボ 他

配給：ケーブルホグ <http://www.cablehogue.co.jp/>

協力：朝日新聞社、日本ビクター

後援：イタリア文化会館（イタリア大使館文化部）

「日本におけるイタリア2001年」財団

オリジナル・サウンドトラック（ランプリング・レコーズ）



●ピッツィカ——サレントの音楽

イタリア南部の人々が愛するピッツィカ（正確にはピッツィ・ピッツィカとくり返される）と呼ばれる民族音楽が、映画のもう一つの主人公だ。古来、毒舌に刺された人間（とりわけ女たち）を癒すために演奏されたこの音楽は、海のうねりのような、怒涛のようなリズムで聴く者をトランスに導き、大地に宿る生の病を探して肉体のなかを駆けめぐり、われわれの魂の奥底に秘められているはずのはるかな記憶を求めて胸を揺さぶる。この伝統音楽である「ピッツィカ」だが、現在では50以上のグループが誕生し、テクノピッツィカやディスコピッツィカなどそれぞれの解釈でピッツィカを表現している。とりわけナディ・アラクヤ・ス・サウンド・システムなどのグループはピッツィカを大衆へと紹介した。

●ZOE'——グルッポ・ゾエ

本作で音楽を手がけるグルッポ・ゾエは、この失われつつあった伝統音楽とその魂を現在にとり戻し、イタリアや世界各地で絶賛されたグループであり、ピッツィカをサレントから外へ運び出し、セミナーを開催してダンスを教える他、各学校でもピッツィカを紹介している。またレッツェ大学とのコラボレーションではピッツィカを海外に知らしめた。現在グルッポ・ゾエのCDは世界中で販売されている。ウィンズピア監督はグルッポ・ゾエ発掘者の一人であり、彼らの良き友人でもある。映画の中でもビーノ・ズィンバが主人公の本人を、ランベルト・ブローボがその弟を（この二人の演技は素晴らしい）、チンツィア・マルツォが別れた恋人を演じている。



映画と人生が出会う奇跡的な瞬間 ——サレントの哀しみの歌

岡本太郎（映画評論家）

いい映画は少ない。

うまくすれば年に何本があるかもしれない、くらいだ。

もちろん「いい」根拠は一つに絞れない。けれどもそれを、ただおもしろい、ではなく、たんにひどくのせられる、だけでもなく、感動を与える、にすると数限られるし、頭を通らざるまづぐ心に届くつかしい何かを与えて、その何かがそのままずっと胸の中に棲みついて生き続けるものという、本当に、少ない。

（数）十年に一度めぐり会えばいい。

その何かは生で、愛と死と祈りで、暗く閉ざされた心の見る夢で、それは降りそそぐ、音のない、まぶしく乾いた夏の陽差しで、妹と母と弟と、そこにはいない父の笑顔と、空を仰ぐ腕と軽やかに踏み交わされるはだしの足で、こぼれ落ちない涙で、そしてそれは赤く灼けた大地の匂いで、古くからの血の流れる顔だちで、打ち鳴らされる大きなタンバリン

で、はるかな時間から聞こえてくる嘆きの歌で、そして、どの人間の中でも記憶と意識の最後の扉の向こうにある哀しみの色だ。

それは、どんな巧みなストーリーテリングも、脳髄を痺れさせる心理描写も、重厚なカメラワークも、どんなに優れた才能も知性もテクニックも呼び出すことのできない、本当に高潔な魂がすべてを捧げた時にはじめて表すことのできるセンチメントだ。

人間と、人生と、正しい世界とここにあることを信じ、そこでしか生きられない感情を、ナイーブなまでに真摯に表す。一步外せば滑稽に映りかねないくらいにまっすぐに、もちろんそんなことには一向に構わない。ほんの数秒で生のすべてのひとつを表現してしまい、たかだか数十年の人生で何万、何千本の映画を観ることができても、もう絶対に忘れられない。ロッセリニの『無防備都市』やフェリーニの『道』やアラノ・ピッチの『トルベド航空隊』で出会ったものと等しい、心を奪い、胸を塞ぎ、視界を霞ませる数秒の希有な人生の瞬間——人生と較べればあまりにも小さく、わずかな時間しか持たない映画と人生のもっとも貴重な時間が出会う、奇跡的な瞬間だ。

——呆れるほど素朴な正義と良心への信仰、ひとりひとりの心の一番奥に置かれたまま、時に一度も呼び起こされずに終わるかもしれない哀しみの歌（ただ、哀しみと飲むは対になっていて、きっと、片方だけとり出すことはできない）。

エドアルド・ウィンズピアの『血の記憶』には、それがある。

Grande retrospettiva del cinema italiano: dal muto agli anni 80

日本における
イタリア年

イタリア映画大回顧

2001年11月13日（火）～2002年2月24日（日）

東京国立近代美術館フィルムセンター

<http://www.asahi.com/event/italia/cineteca>

I capolavori del cinema italiano

Le attrici del cinema italiano

I grandi maestri del cinema italiano

K2カッティング技術によるDVD高画質であの名場面が蘇る!

2001年12月より全10作品ノーカット完全版にて

ファン待望の「イタリア名作選」リリース決定

DVD名作コレクション

ラウラ・アントネリ、ドミニカ・サンダ、ソフィア・ローレン、オットヴィア・ピッコロ、テレサ・スタンプ、マルチェロ・マストロヤニ、アンソニー・ティン、ルキノ・ヴィスコンティ、ミケランジェロ・アントニオーニ、ヴィットリオ・デ・シーカ、エドット・スコラ、ネーロ・リージ

「悦楽の園」「善悪の賞罰」「沈黙の官能」「ある女の存在証明」「恋人たちの場所」「白夜」「ランボア 地獄の季節」「特別な一日」「わが青春のフロレンス」「戦場を駆け抜けろ」

問合せ先: 日本ビクター株式会社 JVCビクター音楽映像グループ 03-3498-7865

3/23(sat)--4/5(fri) ROADSHOW!!

3/23(土)～29(金)

13:05/17:05

3/29(土)～4/5(金)

15:15/19:15

扇町
ミュージアムスクエア
ホワイティ 扇町景の広場・10階段上る東へ5分
TEL 06-6361-0088